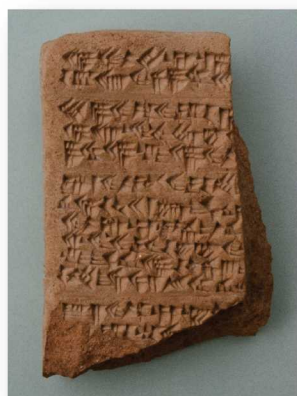


イラク、エスキ・モースルダム水没遺跡群救済発掘調査

北イラクのエスキ・モースル地域にティグリス河を止めてダムを造るので、遺跡救済として、1983年10月から1986年2月まで発掘調査を行った。発掘当初から広い発掘地域がイラク文化遺産局から提案され、また発掘期間も2年半足らずであった。そこで各遺跡の試掘をとおして層位を調査することにした。その調査を通じて確認されたのが下のような各遺跡における時期である。

- ジガーン：ハッサーナ期、ニネヴェ5期、前三千年紀後半、前二千年紀前半、ミタンニ王国時代、中期アッシリア時代
- デル・ハル：無土器新石器時代、ハラフ期、前二千年紀前半、ミタンニ王国時代
- テル・ムシャリファ：ガウラ期
- テル・フィスナ：ニネヴェ5期、前三千年紀後半、前二千年紀前半、ミタンニ王国時代、中期アッシリア時代、ヘレニズム時代、イスラム時代
- テル・スウェイジ：ウルク後期、ニネヴェ5期、前二千年紀前半、新アッシリア時代
- テル・ジェッサリー：ウルク後期、前三千年紀後半、前二千年紀前半、ミタンニ王国時代、中期アッシリア時代、ヘレニズム時代
- カッスール・バナート：イスラム時代

以上の結果からも解るように、北メソポタミアのエスキ・モースル地域は所謂「肥沃な三日月地帯」にあたることから、新石器時代の遺跡が多数発掘されるであろうということ、また新アッシリア時代の都市遺跡、集落遺跡が多く見られるであろうということは大いに推測できた。調査の結果、新石器時代の層はデル・ハルや巨大な遺跡ジガーンに見られ、銅石併用時代後期の層がムシャリファで確認された。言い換えれば、それらは、無土器新石器時代から、ハッサーナ期、ハラフ期にかけての層と、更にはガウラ期の層であった。なかでもムシャリファのガウラ期の三列構成の建物やその時期の土器は南メソポタミアのウルク文化との関係からしても興味深い。南メソポタミアでは、ウルク期の後、シュメールを中心とした文明の勃興と発展があり、次いでアッカド人によるアッカド王朝の樹立、シュメール人の王朝の再興と歴史は動いていくが、このエスキ・モースル地域を含む北メソポタミアでは前三千年紀前半にニネヴェ5期文化が花開く。前三千年紀後半に至って、北メソポタミアは、南のアッカド王朝の一時的な支配を受けるが、その支配から解放されると同時に、そこではウルキシュやナワルとして知られるフルリ人の王国の出現をみる。フルリ人は前二千年紀の中頃、ミタンニ王国を築いた民族であることはよく知られている。国土館隊が調査した複数の遺跡でこれらの時期の文化層が認められている。前2000年を過ぎると、メソポタミアではアムル人が台頭し、多くの場所で支配層にのぼりつめる。ハンムラビ法典で有名なハンムラビもアムル人である。北メソポタミアでは大小の都市国家が散在していたが、そのなかのひとつが交易都市として発展してきたアッカド人支配による都市国家アッシュールであった。前1800年頃、このアッシュールは、アムル人であるシャムシ・アダド（前1813-1781年）が建設した領域国家の一都市となる。短命であったシャムシ・アダド王国崩壊の後、北メソポタミアは再び大小の都市国家に分かれる。そうこうしているうちに、前16世紀には、シリア北東部のハブール盆地にフルリ人を中核とするミタンニ王国が出現し、大きな領域国家が建設される。アッシュールもその支配下に入ることになる。西アジアの情勢は、こうしてヒッタイト、ミタンニ、カッシート、エジプトという領域国家の国際的覇権争いの時代に入る。この間、北メソポタミアでは、「ハブール土器」と呼ばれる彩文土器が使われていたが、エスキ・モースル地域の国土館隊が調査した複数の遺跡でもこの土器を出土する層が確認されている。ハブール土器はミタンニ王国時代まで使われ続けるが、ミタンニ王国時代に入ると「ヌジ土器」と呼ばれる彩文土器が現れる。暗色の彩色帯のうえに白色で文様が描かれるこの土器はミタンニ王国の領域のなかにある都市や町や村落で使われ、「ミタンニの土器」といえるものである。しかし、アッシュール・ウバリト（前1363-1328年）のもとで、ミタンニの支配から脱却し再興はたしたアッシュールが台頭、前13世紀にはミタンニ王国を滅ぼし、ここにアッシリアと呼べるべき領域国家が建設されることになる。これが中期アッシリア時代である。この領域のなかにある都市や町、村落では画一的な土器が使われていた。領域に組み入れた場所はどこであっても、土器の使用までもアッシリア化しようとする、強い支配力がそこに認められる。そのような土器を出土する層も、国土館隊はエスキ・モースル地域の複数の遺跡で確認している。



テル・フィスナ出土のヘレニズム期の粘土板文書

アッシリアは、前1000年前後、一時衰退するが、前9世紀にアッシュールからカルブ（ニムルド）へと遷都を行って以来、バビロニア、レヴァント、さらにはエジプトへと領域を拡大しオリエントの覇者となる。それが「アッシリア帝国」と呼ばれる所以である。アッシリア帝国時代（新アッシリア時代）に、遷都はさらに二度行われ、次の都は現在のホルサバードで、ドゥル・シャルキンと呼ばれたサルゴン2世（前721-705年）の都であった。そして、そこからニヌワ（ニネヴェ）へと遷都が行われ、クウンジユクの丘の上に建つアッシュールバニパル王（前668-627年）の宮殿はアッシリア帝国の栄華を物語るものである。アッシリア帝国は、アッシュールバニパルの死後、王位をめぐる争いが起こり混乱のなかに陥る。こうして、バビロニアはアッシリアの支配から脱却することができた。その機をのがさず、バビロニアではカルデア人であるナボポラサル（前625-605年）が新バビロニア（カルデア）王朝を樹立し、メディア王国のキアクサレス2世と同盟、アッシリアを攻略する。そして、前612年、バビロニアとメディアの連合軍によって、首都ニヌワ（ニネヴェ）が陥落、アッシリアは滅亡する。国土館隊は、この新アッシリア時代の遺構をエスキ・モースル地域で最後に発掘したテル・スウェイジで確認している。歴史は、さらにアケメネス朝ペルシア時代へと移り、そして遂にはアレクサンドロス王によるオリエント支配となり、ヘレニズム時代をむかえる。そして、パルティア王国、ササン朝ペルシャの支配を経てイスラム時代へと入っていく。このような歴史の流れのなかにおける物質文化の変遷をエスキ・モースルではたどることが可能なのである。

- 【調査活動】
1983年～1986年 科研費（研究代表者：藤井秀夫）
- 第1次調査：1983年10月～1984年7月、テル・ムシャリファ、テル・フィスナ、テル・デル・ハル、テル・ジガーン
井博幸（考古学）、小口裕通（考古学）、小口（八木）和美（考古学）、沼本宏俊（考古学）、山崎やよい（考古学）
 - 第2次調査：1984年10月～1985年2月、テル・ジガーン
小口裕通（考古学）、小口（八木）和美（考古学）、沼本宏俊（考古学）、大沼克彦（考古学）
 - 第3次調査：1985年6月～7月、テル・ジェッサリー
小口裕通（考古学）、小口（八木）和美（考古学）、沼本宏俊（考古学）
 - 第4次調査：1985年10月～1986年2月、テル・スウェイジ、テル・ジェッサリー、カッスール・バナート
小口裕通（考古学）、小口（八木）和美（考古学）、沼本宏俊（考古学）、吉川守（シュメール学）、横倉雅幸（考古学）、佐藤紀子（人類学）

【研究成果】
研究成果：沼本宏俊「テル・フィスナ遺跡の発掘調査」『ラーフィターン』第9巻、井博幸他「テル・ジガーン第1次発掘調査報告」『ラーフィターン』第5-6巻（1984-85）、第13巻（1992）などに報告。大沼克彦・松本健「エスキ・モースル、テル・デル・ハル調査概報、第6層出土の石器」『ラーフィターン』第9巻、H.Fujii(ed.), "Working Report on the first season of Japanese Archaeological Excavation in the Saddam Dam Salvage Project", in the State Organization of Antiquities and Heritage, Baghdad(ed.) Researches on the Antiquities of Saddam Dam Basin Salvage and Other researches (1987)、沼本宏俊「テル・ツウェイジC区発掘調査」『ラーフィターン』第17巻（1996）、沼本宏俊「テル・ジェッサリー出土の遺物」『ラーフィターン』第11巻（1990）、H.Fujii et al., "Preliminary Report on the Excavations at Tell Thuwailji, Tell Jessary and Qasr Banat", Sumer 46(1989-90)等に掲載。



ニネヴェ5期の土器



ハブール土器



ヌジ土器

カッスール・バナート遺跡（遠くティグリス河を望む）

イラク、イラク西南沙漠遺跡群の発掘調査

—アッターール洞窟—

1. 洞窟は何のために掘られたか？

アッターール洞窟は泥灰岩層に走っているクラック（割れ目）に沿って掘削された洞窟であり、古くから蝙蝠がこのクラックや洞窟に群生し、恐らく紀元前1000年頃から現在に至るまで、蝙蝠の糞を集めて販売していた集団がいた。彼らとその泥灰岩の割れ目や洞窟を削ったり、割ったりして、蝙蝠の糞を集めていたことから、その洞窟が次第に大きくなっていったと思われる。C14年代測定に使用したのはナツメヤシの葉の芯の部分で、これらは、最下層の礫層の中に、またクラック（割れ目）の間に発見された。同じようなナツメヤシの小枝が現代の蝙蝠糞集めの人々に使われていることから、古代においても蝙蝠の糞集めのためにこのナツメヤシの小枝が使用されていたと思われる。

2. 洞窟は墓地に利用され、聖者が埋葬されていた。

アッターール洞窟群は紀元後1～3世紀頃に、墓に利用された。また墓に使用するために洞窟を加工したり、新たに造ったりした可能性もある。その被葬者は恐らくクセイル（アッターール洞窟から西16キロに位置する）やテル・ウハイダル（ウハイダル宮殿の北東隣）の住民であった。そして、遺体が纏ったガウンのような衣服には特別なマーク（H、Γ、↑など）が織られていた。これらのシンボルは聖者、天使などの聖職者にしか見られない特別なものであった。また神々などをワッペンに織り込んで、それらを身につけていた被葬者もあり、恐らくこの地域（アッターールからクセイル周辺）の有力者たちの人々であったと思われる。

3. ワディ・ウバイドは古代から、メソポタミアとアラビアとの交易路として利用された。このアッターール洞窟群はメソポタミア低地とアラビア半島との間のイラク西南沙漠地帯にあり、その交易路のワディ・ウバイドの出入り口になることから、この洞窟が仮住いに、また見張り場所、避難場所などに利用されたことが確認された。それは中期アッシリア時代、新バビロニア時代、アッパース朝時代などであり、これらの時代にはこのアッターール洞窟、特にワディ・ウバイドがメソポタミアとアラビアとの間の交易、交流で、盛んに利用されていた。

4. アイン・シャーイアは沙漠の修道院だった。アッターール洞窟（A丘、C丘）と同じような環境の沙漠地帯で、ナジャフの西側の崖線を北西へ約12キロにあるアイン・シャーイア、ドゥカキン洞窟などの遺跡ではキリスト教ネストリウス派教会の修道院が発掘された。これらの遺跡からは十字架を型押しで浮き彫りにしたスタッコ製の小板が複数、壁に描かれた十字架、ガラス器、青磁等の破片のほか、碗に書かれたシリア文字の墨書などが発掘され、これらは八世紀ころのアッパース朝時代に、沙漠に築かれた修道院と推定された。



C-17洞窟の埋葬状況



C-12洞窟の埋葬の一部

5. 上記のように我々の調査研究によって、古代よりメソポタミアとアラビアとの交流がワディ・ウバイド、アッターール洞窟をとおして行われていたことが明らかとなった。そうした中で、沙漠地帯のオアシス、ワディが交易に利用されて、その地に隊商都市、城砦、見張り塔などが造られていた。中でもアッターール洞窟は隊商都市や遊牧民の墓地に利用されていた。その対象となる都市遺跡はクセイル、テル・ウハイダル、シサーサなどであり、その墓に埋葬されていた人々は身に纏っていた衣服や副葬品からこの地域の聖者と呼ばれるような人々であった。

6. イラク西南沙漠遺跡タール・ジャマル旧石器遺跡の調査、1972年、1973年、科研費（代表者：藤井秀夫）

イラク西南沙漠遺跡発掘調査第3次及び第4次アッターール洞窟と並行して、タール・ジャマル旧石器遺跡調査が行われた。A丘の南隣にカルバラ台地が侵食され、堆積した扇状地があり、その上をカルバラとウハイダル、シサーサを繋ぐ沙漠道路が東西に走っている。その斜面に旧石器が分布していた。この遺跡はすでにソレッキーらによって報告されていたが、1972年、1973年、さらに詳細に表面採集して、ルヴァルワ石核、ムステリアン・ポイントなど約1200点を採集した。これらはシリア、パレスチナ、サウディ・アラビアと関連する中期旧石器と思われる。この他に、ワディ・ウバイドにはハフナット、ウハイダルとシサーサの間に位置するアブジェにも旧石器が分布していることが明らかとなった。



A丘出土の織物



C-12洞窟出土の織物

【調査活動】

1969年5月～10月 藤井秀夫文学部教授がユーラシア諸国を踏査中、イラク西南沙漠でアッターール洞窟発見。

●第一次調査：1971年3月～10月 A, B, C, D, E1洞窟発掘、OTCA

藤井秀夫（研究代表者）、井博幸（考古学）、戸田有二（考古学）、高松勝彦（助手）

●第二次調査：1972年10月～1973年6月 E2-1, 2, 3, F1, F2, F3洞窟発掘、OTCA

藤井秀夫（研究代表者）、榊原吉郎（美術史学）、松本健（考古学）、竹村利之（建築史）、河名俊男（地理）、牛木久夫（水文学）、Abdul Razak（イラク政府代理）

●第三次調査：1973年9月～1974年3月 F4, F5, F6洞窟発掘及び洞窟遺跡分布調査、タール・ジャマル調査、OTCA

藤井秀夫（研究代表者）、河名俊男（地理学）、江上波夫（考古学）、松本健（考古学）、戸田有二（考古学）、大沼克彦（考古学）、竹村利之（建築史）、木村重信（美術史）、石田英実（人類学）、三上勝也（社会人類学）、杉田くるみ（人類学）、Abdul Razak（イラク政府代理）

●第四次調査：1975年8月～1976年3月、C-17, C-12洞窟発掘、タール・ジャマル調査、科研

藤井秀夫（研究代表者）、松本健（考古学）、大沼克彦（考古学）、和田克明（考古学）、稲岡裕江（考古学）、河名俊男（地理）、松尾順子（材料被服学）、成瀬信子（材料被服学）、石田英実（人類学）、山田久男（岩石学）、江上波夫（考古学）、菅原信（写真家）、Nadir Al-Rawi, Sabah Al-Kadi（イラク政府代理）

●第五次調査：1977年9月～1977年12月 C-16洞窟、科研 藤井秀夫（研究代表者）、井博幸（考古学）、浜野健也（岩石学）、牛木久雄（水文学）、日下部実（岩石学）、サラハディーン・ハミド・フェリド、フアラ・アブドルハーディ・アビド（イラク政府代理）

●第六次調査：1984年9月～12月、イラク西南沙漠遺跡：第六次アッターール洞窟C-12洞窟調査、科研 藤井秀夫（研究代表者）、大沼克彦（考古学）、坂本和子（染織史学）、笠原明子（美術史学）、高世富夫（建築史学）

【研究協力者】

赤沢威（考古学）、石井恵美子（事務職員）、井熊摩耶（翻訳）、池田次郎（形質人類学）、市橋幹蔵（染織学）、上杉陽（分析）、江本義理（保存科学）、岡田浩美（染織史）、小川安朗（染織学）、小口裕通（考古学）、大平洋子（土器分析）、川又正智（考古学）、小坂丈子（火山学）、片山一道（形質人類学）、木越邦彦（C14年代）、北原實徳（考古学）、佐藤芳郎（事務）、柴田英明（土木工学）、島司益男（フィッシュントラック年代測定）、島誠（植物学）、高木豊（染織材質分析）、中川善兵衛（岩石分析）、那須孝悌（岩石分析）、原口陽子（染織学）、平尾良光（金属器分析）、布施美智雄（分析）、松井孝代（資料整理）、松谷敏夫（考古学）、松本英夫（分析）、松本淳子（資料整理）、松村明子（事務職員）、山崎和夫（ガラス分析）、山田久夫（岩石分析）、太田英蔵（染織学）

【研究成果】

Hideo Fuji 編著、1976, Al-Tar I, Excavations in Iraq, 1971～1974, Hideo Fuji 他、1980『ラーフィダーン』第1巻、特集記事：イラク、アル・タール出土の染織・皮革遺物の研究、他、『ラーフィダーン』第3～4巻（1982～83）、第5～6巻（1984～85）、第7巻（1986）、第9巻（1988）、第10巻（1989年）、第11巻（1990）、第12巻（1991）、第13巻（1992）、第14巻（1993）、第15巻（1994）、第17巻（1996）、第18巻（1997）、第25巻（2004）に掲載。

アッターール洞窟A丘

イラク西南沙漠遺跡調査－アイン・シャーイア、ドゥカキン洞窟－

アイン・シャーイアはナジャフの西北約2 kmの沙漠地帯に位置し、アッタール洞窟同様にカルバラ台地の西端の崖線に沿ったところに、城壁に囲まれた区画を含む平地遺跡アイン・シャーイア遺跡と、アッタール洞窟同様、崖に掘削された洞窟群のドゥカキン洞窟と呼んでいる遺跡群がある。これらはアッタール洞窟遺跡の調査中に既に発見された既知の遺跡で、特にアイン・シャーイアのような平地遺跡と洞窟遺跡との関係が明らかにされると期待された。

発掘の結果、この平地遺跡には教会跡が発掘され、壁画のある至聖所を有する三廊式だったことが判明したほか、十字架を刻んだ小品やガラス容器など多数が出土した。またネストリウス派キリスト教の証拠ともなるシリア文字の墨書が、碗の破片や漆喰壁の破片などに見出された。崖の側には湧き水が溜まる小さな泉があり、その水の流れを追って発掘したところ、カナート（地下水路）が教会のある城壁内へ引かれていたことが明らかとなった、また教会跡から北西へ330mの地点には同じ形状の部屋が3つ並んだ建物で、僧院と思われる建物が発掘され、この部屋からは十字架を型押しで浮き彫りにしたスタッコ製の小板が複数発見された。またそのそばから、水槽の施設が発掘され、この施設も教会の付属施設であると思われる、洗礼を行った施設かもしれない。その僧院から北西へ470mの洞窟群（ドゥカキン洞窟群）の一つを発掘したところ、洞窟はアッタール同様、内部はジグザグに奥深く掘削された洞窟であるが、その一時期、即ち教会と同時期にこの洞窟群が居室、おそらくは修道僧の独居房として利用されたいことは、この部屋からもシリア文字を記した土器片が出土したことから明らかである。

これらの遺跡の時代は恐らくアッバース朝時代で8世紀前後であると思われるが、イスラーム教の古都クーファの西隣の沙漠地帯に、ネストリウス派キリスト教の教会とそれに付随する施設のコンプレックスがあって、多くの人々が活動していたことが明らかとなった。



キリスト教会跡



僧院の壁にはめこまれていた十字架



教会跡から出土した小板状の十字架

【調査活動】

1986年9月～1989年2月、研究代表者：藤井秀夫
 第1次：1986年9月～12月、アイン・シャーイア、ドゥカキン洞窟
 第2次：1987年11月～1988年2月、アイン・シャーイア、ドゥカキン洞窟
 第3次：1988年11月～1989年2月、アイン・シャーイア、ドゥカキン洞窟

【研究分担者】

岡田保良（建築史学）、大沼克彦（考古学）、松本健（考古学）、沼本宏俊（考古学）、柴田英明（土木工学）、小宮妙子（ボランティア）

【研究協力機関】

朝日新聞社、石橋財団、岡墨光堂、川島文化事業団、文部科学省、在イラク日本大使館、ユネスコ、国際協力機構（JICA、海外技術協力事業団OTCAを含む）、日本学術振興会、イラク共和国情報文化省考古遺産庁、ヨルダン文化省考古庁、シカゴ大学オリエンタリヤ研究所、ミュンヘン大学近東考古学研究所、イラク、モスル大学、中近東文化センター、古代オリエンタリヤ博物館、文化女子大学、川島織物テキスタイルスクール、東京国立博物館、東京国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所、東レ繊維研究所、学習院大学C14年代測定木越研究室、東京工業大学、三菱財団、三菱商事、石橋財団、トヨタ自動車、日産自動車、ホンダ株式会社

【研究成果】

藤井秀夫、他「アイン・シャーイア遺跡とドゥカキン洞窟の発掘報告」（英文）『ラーフィダーン』第10巻（1989）、岡田保良「アイン・シャーイア遺跡出土の板状十字架について」（英文）『ラーフィダーン』第11巻（1990）、第12巻（1991）、第13巻（1992）岡田保良「アイン・シャーイア修道院遺跡とイラクの初期キリスト教教会形式について」『パラレル』西洋建築史研究会編2003などに掲載

ドゥカキン洞窟（この一部が修道僧の独居房として利用されていた）

ヨルダン、ウム・カイス遺跡調査

国士舘大学文化遺産研究プロジェクトがヨルダン、ウム・カイス遺跡を発掘調査するようになったのは、2003年3月のイラク戦争で、イラクの文化遺産が略奪され、破壊されたことに対して、我々に何ができるかという問いから始まった。各国からイラクの専門家がUNESCO本部に集まって、イラクの文化遺産復興（ICC）について協議した結果、JICA、ユネスコ、ヨルダン考古局が共催で、国士舘大学が協力して「第三国イラク文化遺産復興のための研修」をヨルダン、ウム・カイス遺跡で行うことになった。研修は2005～2010年まで、毎年、夏に2ヶ月、春に2週間、イラク人研修生約15名、ヨルダン人研修生5名、また2011～2012年は春にフォローアップとして年2週間、文化遺産の研修が行なわれた。同時に2005年から2010年までの5年間、私立大学学術高度化推進事業（学術フロンティア推進事業）「戦後イラクの社会基盤に活かす文化遺産学研究」（平成17年度～平成21年度）（研究代表者：松本健）も実施し、研究、実践の両面から、ウム・カイス遺跡において実際に地理的環境調査、発掘調査、保存修復研究、そしてマネージメントに至るまでの調査研究を実践し、あわせて文化遺産をイラクで、経済的・教育的還元を活かせるよう、文化遺産学として構築していくことを目的として行われた。

遺物遺構の保存修復

ウム・カイス遺跡の発掘調査に伴い、以下のような応急処置を行った。コインのクリーニングと保存処置、人骨、獣骨のクリーニングと保存処置、土器やガラスの修復・保存処置、碑文の保存処置、またモザイクのクリーニングと修復・保存処置、漆喰壁、ストッコの修復・保存処置、列柱道路及びフォーラムの円柱の修復などである。



国士舘大学21世紀アジア学部考古学実習生と地元の発掘作業員達



国士舘大学21世紀アジア学部考古学実習

西円形劇場の修復事業

2015年度からは朝日新聞文化財団文化財保護活動助成を受けてヨルダン考古局・国士舘大学、ウム・カイス遺跡西円形劇場共同修復事業を2年間、現地との連絡をインターネットや電話などで連絡を密にしながら西円形劇場の3D測量、現状記録、石材の分布調査等を実施した。しかし、中東情勢の悪化もあって、国士舘大学は2017年度以降、このウム・カイス遺跡西円形劇場共同修復事業を中止することを決定した。

文化遺産教育

現地での文化遺産保存事業の一環として、ウム・カイス中等女学校と東京都板橋区立三園小学校高学年とのインターネットによる互いの国の文化遺産の紹介、また文化の紹介などを毎年10月に交換交流しながら、文化遺産教育を進めた。また国士舘大学21世紀アジア学部、グローバルアジア研究科の毎年夏に1ヶ月間のヤルムーク大学でのアラビア語研修に続いて、ウム・カイス遺跡での西アジア考古学の授業として毎年2週間実施し、中東の文化遺産・歴史の教育も実施してきた。



修復が待たれる西円形劇場

【調査活動】

2005年4月1日～2010年3月：文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア研究推進事業）「戦後イラクの社会基盤復興に活かす文化遺産学研究」（研究代表者：松本健）
2005.04.01～2006年3月31日：平成17年度「国士舘大学研究教育支援プログラム」（学長裁定経費）「戦後イラクの社会基盤に活かす文化遺産学研究」（研究代表者：松本健）
2005年4月～2010年3月：「第三国イラク人文化遺産研修」、2005年度～2009年度：JICA、UNESCO、Jordan DoA共催、国士舘大学協力、ヨルダン、ウム・カイス遺跡にて（チームリーダー：松本健）ヨルダン、ウム・カイス遺跡調査、国士舘大学文化遺産研究プロジェクト
2016年度～2017年度：ヨルダン、ウム・カイス遺跡西円形劇場ヨルダン考古局・国士舘大学共同修復事業：2015年度～2016年度、朝日新聞文化財団助成（研究代表者：三浦信行（2015年度）佐藤圭一（2016年度））

【研究分担者】

松本健、岡田保良、西浦忠輝、戸田有二、柴田英明、小野勇、長谷川均、東郷正美、後藤智也、川上直彦、片多雅樹、藤田浩明、江添誠、岡田真弓、富田富喜夫、吉武隆一、Jafar Talefah、児玉智明、沢田正昭、岡岩太郎、平山優、古谷直嗣、鈴木和也、高田作郎、伊佐山隆男、岩田玲子、西邑雅未、小野間智子、相川悠



国士舘大学学生とウム・カイスの女子中学校生との交流



ウム・カイス（古代名：ガダラ）遺跡の列柱道路

【研究成果】

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業『戦後イラクの社会基盤復興に活かす文化遺産学研究』プロジェクト番号「F050051」：「ヨルダン、ウム・カイスにおけるイラク人の文化遺産研修」、2009.2、国士舘大学文化遺産研究プロジェクト（研究代表者：松本健）ウム・カイス遺跡の発掘調査、修復事業：「文化遺産学研究」第1巻（2009）～第10巻（2016）（国士舘大学文化遺産研究プロジェクト）に随時報告。

ウム・カイス遺跡（古代名ガダラ）の発掘調査

このウム・カイス遺跡は1886年にドイツのシューマッハーが調査したのがきっかけとなり、以後主としてドイツプロテスタント聖地古代学研究所によって長く発掘調査や修復がなされてきた。また近年はヨルダン考古局、さらにはヨルダンのヤルムーク大学などが発掘している。我々国士舘大学調査団がイラク人研修を兼ねて2005年から、発掘調査の前の地理、地形などの情報収集や遺跡の平面図の作成をおこない、そしてアクロポリスの西側の低地、「初期ローマ時代の市門地区」の東側地区、またデクマヌス・マキムス（大通り）の北側地区の発掘調査を行ってきた。調査は毎年2ヶ月間実施されてきたが、2015年2月にIS（イスラム国）による日本人殺害事件が起こって以後、ヨルダンへの渡航が禁止され、発掘調査は中断している。

ヘレニズム時代（紀元前331～63年）：発掘調査によって南区の岩盤（石灰岩）に彫られた石切り場或は地下墓などの遺構が検出され、アクロポリスの城壁外にも、ネクロポリスが新たに確認された。尚、ウム・カイスの遺跡から北側の斜面を降る途中に、アイン・マケークという泉があり、その遺跡の試掘からもヘレニズム時代の文化層を確認している。

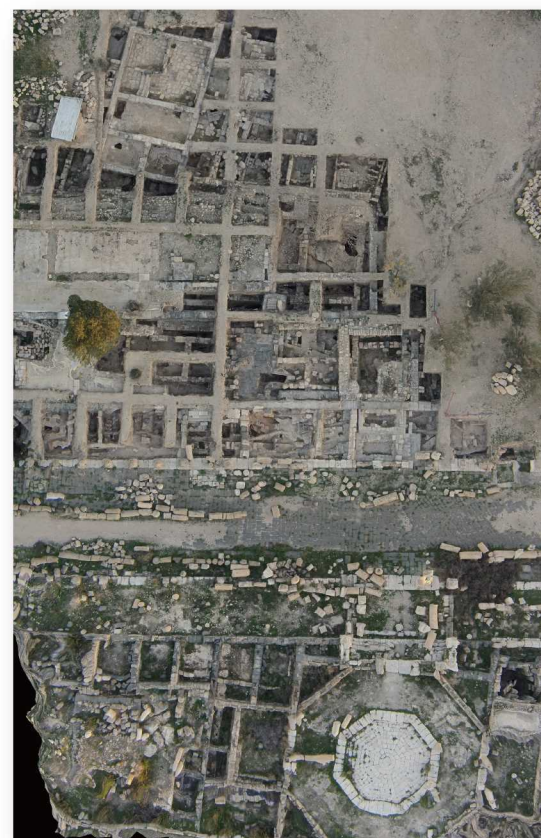
ローマ時代（紀元前63年～395年）：紀元前63年にはポンペウスがガダラを征した後、復興し、繁栄していくことになる。我々が発掘した「初期ローマ時代の市門付近地域」での南区の「ローマンハウス」（Bil. 4）、北区の「モザイク床を持つ建物」（Bil. 3）の下層に「最下層のモザイク床を持つ建物」（Bil. 7）が確認された。これは上層同様の平面を持った建物（Bil. 3）の基礎壁でもある北区東側の「広場と通路を持つ建物」（Bil. 6）の下層の「最下層の建物」（Bil. 8）の全体プランはまだ明らかではないがBil. 6の基礎壁にもなっている。「ローマンハウス」（Bil. 4）の一部と思われる壁が初期ローマ帝国時代とされているデクマヌス・マキムス（大通り）の下層に延びていることから、デクマヌス・マキムス（大通り）を、後期ローマ時代であると訂正すべきなのか、更なる詳細な分析が必要となっている。

ビザンツ時代（395年～636年）：ガダラは4世紀後半にキリスト教化した。そして南区の「ローマンハウス」（Bil. 4）の上層に建てられた「モザイク床を持つ建物」（Bil. 1）、その北側に付設の「スラブ床のテラス」（Bil. 2）、北区の「西側の「モザイク床を持つ建物」（Bil. 3）、東側の「広場と通路を持つ建物」（Bil. 6）などがこの時代に当たる。Bil. 3の床からは十字架のシンボルが付いたランプなどが出土し、ビザンツ時代にあたることを示している。

ウマイヤ朝（636年～750年）：ビザンツ時代の建物が放棄、破壊されて、デクマヌス・マキムス（大通り）に沿って両側に、壊された円柱や切石を積み上げた壁だけの簡易住居（Bil. 5）が連ねられていた。また北区の「建物（モザイク床）」（Bil. 3）は放棄された後に人々が仮住いに再使用したようである。

上記のような層位のなかで、どのような変遷が行われたのか、ガダラの人々が信仰したヘレニズム、ローマの神々、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教などに変わっていく中で、どのような変化が人々に起こったのか、ローマ文明解明のための更なる調査研究が必要である。

モザイク床を持つ建物（Bil. 3）



国士舘大学の発掘調査区域



ウム・カイス遺跡のモザイク床



ウム・カイス遺跡のアクロポリス